

非母語話者日本語教師の再教育に関する実証的研究 —過程重視の聴解指導を通して—

横山 紀子

学位取得年月：平成 18 年 3 月

取得学位名：人文科学博士

学位授与機関名：お茶の水女子大学

【キーワード】非母語話者日本語教師、第 2 言語教師教育、対面聴解、聴解過程、聴解ストラテジー

【要旨】

約 6 ヶ月の再教育研修に参加した非母語話者日本語教師（以後、NNJLT : Non-Native Japanese Language Teacher）23 名を対象に、聴解の目標言語学習が学習観・指導観に与える影響を検証した。調査対象の NNJLT は、言語学習は言語知識を獲得することであるという認識を持ち、言語学習を技能や学習ストラテジーの習得という側面から捉える視点が欠けていることが観察される。そこで、本研究では、調査対象者が自国で経験した学習とは異なる新規学習体験として過程重視の聴解指導を提供することにより、教師としての認識に内省を生じさせることを目標とした。過程重視の聴解指導とは、近年の第 2 言語理解過程の研究成果に基づき、聴解過程を支えるストラテジーを積極的に導入するものである。調査の設定としては、日常的な言語生活の中心である対面聴解場面を選んだ。調査対象者の日本語運用力は中級程度、23 名中 20 名が初来日である。

以上の背景に基づき、本研究は次の 3 つの課題に回答を求めるものである。

【研究 1】NNJLT の対面聴解過程はどのようになっているか（横断的調査）

【研究 2】NNJLT の再教育において、過程重視の聴解指導は、NNJLT の対面聴解過程をどのように変化させるか（縦断的調査）

【研究 3】NNJLT の再教育において、過程重視の聴解指導という新規学習体験は、既得の学習観・指導観をどのように変容させるか

【研究 1】では、1 対 1 の対面で物語を聴く調査において、(a)調査対象者が聴き手として発した質問や反応、(b)聴解直後の再生作文（母語）、(c)聴解場面の録音を聴き返しながらの回想インタビュー（母語）の 3 種のデータを採取した。理解上の問題を解決する手がかりとして参照されたテキスト範囲を「モニター範囲」として、分析の指標としたところ、再生作文の再生率が高く、テキスト理解がよかった調査対象者は、「モニター範囲」が広いことがわかった。この結果を受け、「モニター範囲」とテキスト理解との関連を数的に分析したところ、両者の間には有意な相関があり、「広範囲モニター」をよく用いる聴き手はテキストをよりよく理解したことが検証された。【研究 2】では、再教育前後の調査結果を比べた結果、「広範囲モニター」の増強を始めとする聴解過程の変化が観察され、「広範囲モニター」が指導可能であることを示すことができた。【研究 3】では、インタビュー調査、意識調査、NNJLT が記述した聴解指導教案をデータとして分析した結果、NNJLT の認識が過程重視の聴解観を反映する変容を見せたことが明らかになった。また、聴解指導観の変容は、自身の聴解過程の変化と関連があり、【研究 2】で「広範囲モニター」の増強が強く見られた NNJLT ほど教案の活動に過程重視の聴解観が強く反映されていた。

(よこやま のりこ)